

事例 [イ] 自立心



こども園こどもむら

お当番活動における“失敗からの学び”

「お食事当番」は毎朝、米とぎから始まります。4人のお当番さんが、調理室からもらった今日食べる分のお米を保育室でとぎます。慎重にお米をこぼさないように気を付けますが、時には釜をひっくり返したり、大量の米をこぼしたり、水の量を間違えたり、ごはんが足りなかったり多かっ

たりと失敗の繰り返しです。そのような経験を通して、子どもたちなりにいろいろな意見を出し合い、どうすればうまくいくかを考え始めました。

自分たちでルール決め

「おいしいごはんが食べたい!」という子どもたちは3つのルールを作り出しました。

- ① お当番は2人ずつで、協力しあいながらやる
- ② お米を調理室からもらわず、自分たちで米びつ

から量る

- ③ メニューによって毎日炊く量を変える

そして、丁度いいお米の量を何日もかけて調べます。お茶碗で食べるときは5合と6合、どんぶりの時は7合と8合、お休みが多いどんぶりの日は6合と6合と考え、表を作ります。

それからは、毎朝、ランチのメニューを見て、炊くお米の量が書いてある表で確認し、2人1組のお当番さんが、間違いないように2人で声を出し合って「1合～2合～」と数えながら米びつから計量カップを使い量ります。子どもたち自身の力で失敗から学び、その学びを生かして、今は毎日おいしいごはんを食べることができています。



自分はお米を調理室からもらっていたけど...



自分たちで米びつから量ることになったよ!



お米とぎ!



毎日メモして、丁度いいお米の量を調べたよ。



パンがない!!

「どうしましょう…」「パン買ってきますか？」
この日は業者のミスでパンが届かないというトラブルが起きました。保育者たちが思案していると、「ごはんを炊いたらどうか？」と5歳児さんからの提案が…。そこで、子どもたちに任せてみようということになりました。

子どもたちはまず、話し合いを始めます。「今日のランチのパンが届かないからどうしようか」「今日のメニューはなんだろうか」と。そして、話し合いの結果、「ごはんを炊いたらどうか」「炊立通りパンがいいんじゃないか」と2つの案が出たため、2つのグループに分かれ、再び話し合います。ごはんを炊くと考えたグループはおにぎりを作

ることにします。

- ・おにぎりを作るには何合炊けばよいか
- ・3歳児、4歳児はどのくらい食べるのか

パンがいいと考えたグループはスーパーに買いに行くことにします。

- ・炊立のパンは何のパンだったか
- ・パンを何枚買えばいいのか
- ・スーパーに買いに行き、値段を調べる

キッチンの調理師に聞いたりしながら、一つひとつ考え、買物係と調理係に分かれ、行動を開始します。



少し遅い時間のランチとなりましたが子どもたちの活躍によって、おいしいランチを食べることができたのです。

成功体験を積む

子どもたちはお当番活動を通して、自分の役割・

自主性・責任感を培っていきます。今回の子どもたちの行動は、日常的に小さなことでも自分たちで問題解決の方法を見つける習慣を作る行動だったと感じています。保育者は失敗からの学びを信じ、子どもたちをあえて見守ることも大切と考えます。

事例 [ケ] 言葉による伝え合い

くないのです。それもその子の表現です。何かの理由で詳しく言いたくないんだと言っているのに、根掘り葉掘り聞くのはやめてほしい。子どもたちは表現しながら生きています。その表現をしてくれた事自体を、私たちは大事に思いましよう、と。

 相手が大人だったら、要するに大人同士だったら、何かの理由で詳しく言いたくないんだ、と推察するでしょうね。でも相手が子どもだとつい深掘りしてしまうでしょうね。

 でね、根掘り葉掘り、聞いても答えてくれそうにない時は、もうやめる。でも、もうちょっと聞きたいな、答えてくれるんじゃないかなという時に「その時どうだったの？」というのは、これはいいのです。相手の態度を見て判断してやっていく。これはもう、保育者のものすごい細かい観察が、判断の機微が必要なところですね。こういう状況は、保育者側にも良い訓練になるとも思っています。



そっかー……

 なんだか、保育者の人間関係能力が問われるような感じですよ。保育者や友だちから大切な存在と認められていることが、心から本当の気持ちを、意味の深いところからストレートに表すための前提になることもありますね。



大道長小道具、
衣裳も
全員で手作り

◇ *
◇ *
◇ *

こども園こどもむら

劇は役割をもって自分たちで

発表会の劇は子どもたち主体で行い、役割をもって作り上げていきます。台本係は「どんな言い方がいいかな」「こんな言葉を使ったほうがいいんじゃない」などと相談しながら紙にセリフを書いていきます。鼓笛の時に使った楽器を使い、効果音も音を出しながら、劇中に合う音を探して



セリフもみんな覚えてきたよ!

ちょっと待って!

紐で小道具作り!

段ボールに絵を描く大道具作

いきます。

大道具係は段ボールに絵を描き、段ボールカッターで切り、金づちと釘を使い、木材でテーブルを作ります。段ボールカッターやノコギリ、金づちなど、材料の違いでいろいろなお道具を出しては使い、「ここ持っていてね」「下をおさえて」などと言いながら協力して作っていきます。
小道具係は木の枝、木の葉、毛糸、布などいろいろな素材を使い作っていきます。「これはポン

ドではくっつかないよ!」「グルーガンを使おう」など、素材に合うものは何なのかを考えながら作り上げていきます。
こうして子どもたちだけで話し合う機会が増え、「それいいね」と気持ちを共有し、「それは違うと思う」と思いが通らない時に折り合いを見つけたりしながら、思いや言葉の伝え合いが自然とできるようになっていきます。

秘密基地作り

ロフトで遊んでいた二人。たまたま置いてあった段ボールを見つけ、「ロフトに二人だけの秘密基地をつくらうよ!」とコソコソ話を始めます。発表会の劇で大道具を作った経験から、早速、段ボールカッターを使いドアを作ってみます。
「ホチキス使ってみる?」「ガムテープでくっつけようよ」と二人で頑張りますが思ったようには作れません。何日かして、二人だけでは出来ないかも…と悩み始めます。「誰かにたすけてもらう?」「でも二人だけの秘密基地がよかったなあ」と相談し始め、最終的にはクラスみんなに協力

してもらおうことを決めました。
次の日の朝、「実はロフトに秘密基地を作ってるんだけど、みんないっしょに作ってくれないかなあ」と気持ちを伝えると、「いいよ!」「楽しそう」とみんながロフトに大集合!
ここからクラスみんなで秘密基地作りが始まりました。

炊飯器は丸? 四角?

「秘密基地には何があるんだろう」「絵でかいてみようよ」と設計図を描き始める子どもたち。「外から見えないようにカーテンつけようよ」「ご



段ボールで秘密基地作り!

秘密基地には何がある? 設計図を書いてみよう!



小道具組子が
キッチン道具を作る!



大道具組子が
型を作る!



ポンポンを
カーテンにしよう!



飯食べられるところと寝るところもいるよね」と計画は進みます。設計図ができたところで、発表会の時の役割を生かし、大道具係だった子が壁や天井を、小道具係だった子がテレビやキッチンの道具を作り出しました。

そんな時、丸い炊飯器を作り始めた小道具係さん。それを見た子が「炊飯器は四角じゃないの?」と質問。「ぼくの家の炊飯器は四角だよ」「でも幼稚園の炊飯器は丸だよ」「炊飯器にはいる

いろな形があるんだね」とやり取りをしながら、スペシャルな赤い炊飯器ができあがったのです。

また、カーテンをどう作るか考えていた時、「ももぐみさん(年少児)の時つくったポンポンでカーテンをつくるのはどう?」とSちゃん。「くしでといてこまかくしたよね」と、どうやら年少組の時を思い出したようです。そして、ピンクの素敵なカーテンが出来上がりました。



ひらけ〜
さくら!!



合言葉は・・・

徐々に秘密基地が出来上がり、このことをほかのクラスのお友だちには知られたくないと考えたみんなは話し合いを始めます。

「ほかの人が入らないようにするにはどうしたらいい?」「何かで見えないように隠せばいいんじゃない?」など意見を出し合いながら考えた時、劇の時に言ったセリフ「ひらけ〜ごま!」を思い出します。「そうだ!合言葉をつくらう」「さくらぐみだから「ひらけ〜さくら」はどう?」「いいね!!」ということで秘密基地の秘密の合言葉も



みんなで
つくる楽しいね!



秘密基地!

決定しました。

共感の場

保育者は日常的に主体的な活動ができる環境を整え、言葉を伝えあう喜びを感じ、共感する場を作ることが最も大切だと考えます。

今回の秘密基地作りは劇遊びの経験から、自分の感じたことや思いを言葉で伝えるということをしている場面で行い、ひとつのものを作り上げていく中でみんなの思いもひとつになり作り上げていったのだと思います。



花梨の実を収穫



花梨の実を薄く切って砂糖と煮てみる

こども園さざなみの森

園庭で花梨シロップをつくる

4歳の男の子が園庭に花梨の実がたくさんなっているから採りたいと言い出しました。花梨の木は背が高く手が届きません。どうやって採ろうか一緒に考えてみます。そこを通りかかったスタッフが、竹の先を割って小枝を刺した道具を作り始めました。出来上がったその竹竿で花梨の実を落としてみます。すると子どもたちが集まってきました。

みんなで拾って二三分、たっぷり収穫。思わずかじってみる姿もあります。林檎のように見える

けれど渋くておいしくない…。「シロップにしたら美味しくなるよ」と伝えてみました。

翌日、外遊びの時間に、大人が園庭にガスコンロとまな板と包丁、鍋を持ち出し、外で調理をしました。関心がある子だけ参加です。花梨の実を薄く切って、砂糖と混ぜ、少し時間を置いて、その後、ことごと煮てシロップの完成です。

お湯で割って、檸檬を絞ると美味しい飲み物になりました。調理に参加していない4歳児も列をつくり、みんなで味わいました。お迎えに来たお母さんにも振る舞い、楽しい一日となりました。この様子に触発された3歳児のスタッフは、後日、子どもたちと花梨ジャムを作り、楽しみました。

こども園こどもむら

野菜を育てて調理して食べて遊んで

園内にある小さな畑で育てているのは、じゃがいもやさつまいも、夏野菜、大根や白菜などです。栽培は全学年の子ども達が関わり、種や苗を植え

る事から始まります。

今年は年長児が行う田植えの様子を見学したことから、田んぼでなくバケツ苗にも挑戦しました。稲刈りや昔ながらの脱穀作業をし、炊飯、おにぎり作りをして、おいしくいただきました。じゃがいもの収穫をした3歳児は、ポテトチップ



1, 2: 畑で種・苗を植えるところからスタート 3: さつまいもの収穫 4: 畑についた実を興味深くみつめる

CASE
11

地域と関わった 子育ての支援 ～まちづくりの視点

保育園 幼稚園 こども園 共通

子どもが育つ場であった地域コミュニティが衰退して久しい今、保育にまちづくりの視点が求められています。地域コミュニティの力が弱まっている姿は、大人たちの関わり希薄化と、少子化による同年代・異年齢の子ども同士の関わりが少ないことに表れています。現代の子どもたちにとっての大人は自分の親や先生だけであり、兄弟も少ない生活の中、家庭の中にも外にも“あこがれ”の年長の子どもが存在がない環境です。そこでは子どもの育ちにとって不可欠な遊びも、大人が教えなければならぬ状況になりつつあり、このような環境で子どもがいっばしの大人に育つのは難しいのではないかと危惧があります。であるならば、このような地域コミュニティを再生しなければなりません。単に、かつての地域コミュニティを再生することは不可能といえますので、そこでは、新たな地域コミュニティを作り直すことが求められます。今、その拠点となる場が必要とされています。

こども園さざなみの森

父親が参加することで
地域での生活がより充実したものに

園庭に遊具を作り、子どもの遊び場をもっとよくしたいという園スタッフの呼びかけに、数年前に発足していた「おやじの会」が活発化しました。「おやじの会」には、作業が得意な人から興味はあるが未経験の人など、様々な父親達がいます。

園のそばに、地元の方が持つ里山があり、その森と広場を親子が自由に活動に利用していいと地元

の方が提供して下さいました。その場所で月に一回、土曜日の10～15時を基本に、現在約13組の親子が子どもの遊び場作りに参加しています。まず、竹林を整備し、それから竹を使った遊具やツリーハウスを作りながら、主体的に楽しんでいます。昼食は母親達の出番です。森の広場で煮炊きしてアウトドアクッキングを行います。食材は近くで購入してきて、お勘定は割り勘です。母親が抱えがちな子育てに、父親が参加することにもつながり、子どもから父親への憧れが生まれ、一緒に遊んだ経験の一役を買ったりして

ブを作って「ポテト屋さんごっこ」をやってみたい」という声があがったことから、育てたおいものを調理して食べて、ごっこ遊びを楽しむまでを行いました。土で汚れる中で、年上の子が年下の子の面倒を見たりする心の成長も見られました。

食育活動の中心はいつも子ども達です。活動を

サポートするために、スタッフの協力体制を整えることが大切になります。自然や生活に密着した食育活動を行うことによって「食べる事が楽しい」という気持ちを育み、「おいしいね」といえる子に育ってほしいと願います。



じゃがいもの収穫

みんなで
ポテト屋さん
ごっこしましたよ

はい、
ごーだ!

おいしくなあれよ

おいものスライス
たのしいね

みんなでたべると
おいしいね!